

# 「帯江研」だより

Vol.6

2022/12 発行

帯江鉦山研究会事務局

岡山県総社市門田213 小西伸彦方

E-メール

Falbo524@gmail.com

## 坂本 昇さんとの思い出

難波俊成

帯江鉦山研究会を立ち上げられた坂本 昇さんが令和3年(2021)10月31日にお亡くなりになりました。74歳でした。

山陽新聞社で文化部の記者として、考古学から現代史まで幅広い分野をカバーされ、明快な記事を書かれていたことは定評があったと思います。

私は昭和60年(1985)頃には勤務校である関西高等学校の百年史を編纂していましたが、明治30年(1897)に同校の経済支援組織である「関西尋常中学校維持会基金募集趣意書」なる史料に巡り合いました。

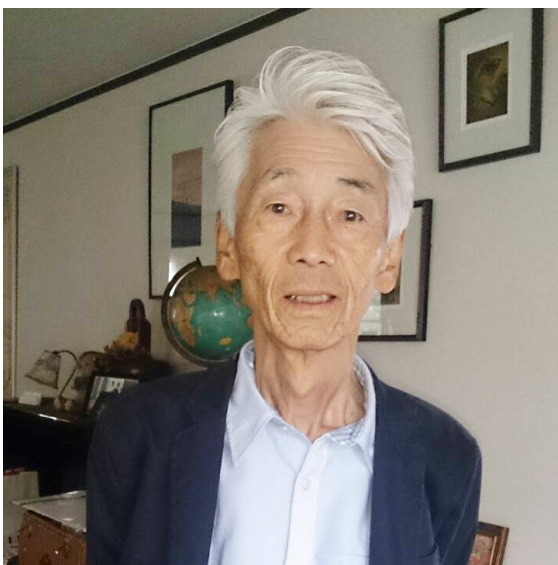
当時は私学助成制度も無く広く県下の有力者からも基金を集め、学校を充実させ引いては大学部をも設置しようとする意気込みが書かれていました。

趣意書には校主である中川横太郎はじめ当時の岡山の錚々たる人たちが20名が发起人として名を連ねています。その筆頭の理事兼評議員に帯江鉦山の経営者坂本金弥が就任していました。

ちょうど坂本 昇さんを知るのと同じ頃だったのですが坂本金弥が坂本 昇さんのご先祖にあたることなど私は全く知らず今となっては恥ずかしい次第です。

坂本 昇さんとは平成2年(1990)になって、やはり関西高等学校に秘蔵されていた明治35年(1902)の卒業生で終戦直後成立する幣原喜重郎内閣の書記官長(現官房長官)次田大三郎が書き残した戦後史の重要史料「次田大三郎日記」を坂本さんが同年4月22日の山陽新聞の一面のほぼ全部に大スクープされたのです。これは組閣の経緯やマッカーサー元帥と幣原首相とのやり取り、天皇の戦争責任など当時の国家機密が書かれているもので大変な話題となりました。遅ればせながら全国紙も翌日にこの記事を掲載しました。

山陽新聞社を定年退職後は美作大学非常勤講師としてお勤めさ



坂本昇さん

れるとともに、本命である坂本金弥研究に没頭され、山陰方面から大阪さらには東京へと精力的に史料収集に出向かれている姿をしばしばお見受けしました。

この頃から肺の疾患が悪化されていったとうかがっています。それでも亡くなるひと月前にお目にかかった時にも坂本金弥のお話を滔々とされました。最後まで情熱を持ち続けた人といえましよう。ご冥福をお祈りいたします。合掌

## 帯江鉦山研究会の活動再開



坂本金弥(坂本家所蔵)

研究会発起人で、『評伝 坂本金弥』の執筆に情熱を燃やしておられた坂本昇氏が金弥を追って黄泉国に旅立たれました。以来しばらくのあいだ、研究会は活動を停止していました。しかし、昇氏が組織された会を存続させ、研究活動を続けることが、昇氏の志を受け継ぐことであると認識をあらたにし、活動を再開することにしました。その第一歩として「帯江研だより」Vol.6を発行いたします。(研究会事務局)

### 帯江鉦山研究会 規約

- 第1条 (名称)  
● 本会は、帯江鉦山研究会(略称・帯江研)と称する。
  - 第2条 (所在地)  
● 本会の所在地は、総社市門田213 小西伸彦宅に置く。
  - 第3条 (目的)  
● 本会は、帯江鉦山とその関連施設、関係する人物等の歴史や遺構の調査・研究を進め、その成果を地域社会へ還元することを目的とする。併せて、会員相互の交流の場とする。
  - 第4条 (活動内容)  
● 本会は、前条の目的を達成するために以下の活動を行う。
    - ・年2回、会員による調査成果の例会報告会を開催する
    - ・地域社会へ還元する場として、講演会や遺跡探訪などを実施する
    - ・資料館や研究グループ等への情報提供や情報交流を行う
    - ・その他、本会の目的を達成するために必要な事業を行う
  - 第5条 (会員)  
● 本会の目的に賛同した有志であることを入会の条件とする。
  - 第6条 (役員)  
● 本会には、次の役員を置く。
    - 代表 1名
    - 事務局担当 1名
    - 監査役 1名
  - 第7条 (役員を選出)  
● 本会の役員は、会員の互選により選出する。
  - 第8条 (役員任期)  
● 役員任期は、9月13日から翌年9月12日までとし、再任を妨げない。
  - 第9条 (会費)  
● 会費は年間1千円とし、これを財源として本会の運営費用に充てる。また、企業や文化財団等に文化活動助成金の支援を仰ぐ。
  - 第10条 (規約改正)  
● この規約は、会員の過半数の同意をもって改正することができる。
  - 第11条 (設立年月日)  
● 本会の設立年月日は令和2年9月13日とする。
- 附則  
● この規約は、令和2年9月13日から施行する。  
● 令和3年5月31日に改定  
● 令和4年11月27日に改定

## からみ煉瓦 ～鉱山特有のリサイクル資源～

市原猛志

帯江鉱山の遺構には、二種類の煉瓦が使用されている。ひとつは倉敷アイビースクエアなどでおなじみの赤煉瓦だが、もうひとつ、赤煉瓦より大きく、黒ずんでいて金属光沢がある煉瓦は「からみ煉瓦（鑄造鋳滓煉瓦）」と呼ばれる組積材だ。このからみ煉瓦は金属の製錬時に大量に発生するスラグの活用方法のひとつとして18世紀からヨーロッパで用いられ、現在でもイギリスやスウェーデンの鉱山遺跡では日本と同様のからみ煉瓦を見ることができる。スウェーデン中部の「ファールンの大銅山」は、17世紀に世界全体の銅生産量のうち、三分の二を担う鉱山であったが、ここで製錬時に発生したスラグは、からみ煉瓦として生産設備に使用（写真）され、2001年の世界文化遺産登録に際しては、このからみ煉瓦構造物も構成資産の一部となっている。

からみ煉瓦の日本国内への導入はいつだったのか、実は詳しいことは分かっていない。兵庫県の官営生野銀山や秋田県の阿仁鉱山が比較的早い導入事例として知られており、明治期には日本国内の主要銅山でからみ煉瓦の生産が行われていた。その形状は、長方形のものがほとんどであるが、なかには六角形や通常の煉瓦とほぼ同じサイズのものもあり、日本国内での独自の発展が行われた可能性もある。

このようなからみ煉瓦の歴史は、赤煉瓦の歴史と同じく関東大震災以降、鉄筋コンクリート構造物の普及に伴い衰退の一途をたどる。煉瓦や石材に見られる組積造構造物は、圧縮力に強い反面、引っ張りに弱く、地震によって発生する横揺れの際に倒壊の危険性をはらむ。瀬戸内近郊において銅製錬の主要な工場であった別子銅山や足尾銅山でもからみ煉瓦の遺構は戦前期のものがほとんどで、戦後のからみ煉瓦生産が行われていたところとしては、物資の輸送に難があった香川県直島の製錬所など限定されたものであったと考えられる。

現在鉱山や製錬所近郊に遺るからみ煉瓦は、近代の日本が西洋技術を導入する際につくられた歴史そのものであり、また一度喪われてしまうと再び生産されることのない、希少な地域の財産でもある。近年の持続可能型社会の視点においても、鉱山資源の副産物を利用する考え方は、リサイクル産業の原点とも言えよう。このようなからみ煉瓦の産業遺産を観光に、また何よりも地域教育に組み込み次世代の育成に貢献することが、これからの社会を考える上で重要ではないか。



スウェーデン・ダーラナ地方に残る銅山とからみ煉瓦3階建の事務所施設。この銅山は10世紀からおよそ1000年にわたり銅を採掘し続けており、2001年に「ファールンの大銅山地域」として世界文化遺産に登録された。ここで銅製錬時に発生するスラグは、現在でも塗料材として加工されており、「ファールンレッド」という名称で木造住宅の外壁を彩り、地域の景観を形成している。



市原猛志（いちばら・たけし）  
熊本学園大学商学部講師、NPO法人北九州COSMOSクラブ副会長、九州大学大学文書館協力研究員。専門は産業技術史、観光学、材料史学。

## 坂本金弥を語る

### 大正六年の坂本金弥の衆議院議員選挙と久米郡(一)

前田 昌義（中庄の歴史を語り継ぐ会代表）

帯江鉱山を経営していた坂本金弥は、政治家としても活躍した。坂本金弥は明治三十一年（一八九八）の衆議院議員選挙で進歩党から当選し、政界に入る。大正二年（一九一三）の大正政変前、犬養毅らの立憲国民党から立憲同志会結成に参加する。しかし、立憲同志会から外れて、大正四年（一九一五）には市部から中立で選出され、大正六年（一九一七）には郡部から中立で出た。『山陽新報』大正六年（一九一七）三月十二日付「逐鹿界 坂本氏と復党」では、「国民党岡山支部にては坂本氏を復党せしめ作州における候補者として推薦せんとの計画あり」として、代表が上京して犬養毅の意見を聞いたが、賛同しなかったため、なんとかしようとして奔走中であるとしている。こうしたことから、坂本金弥は中立とはいえ、地元では国民党系の人々が坂本の選挙を担ったのではないかと考えられる。

この坂本金弥の選挙活動を久米郡で中心的に担ったのが、小川芳太郎であった。稲岡北村・加美村（現美咲町）の村長を務めた小川芳太郎は、明治三十五年（一九〇二）憲政本党岡山県支部評議員になっている。このころから小川は、犬養毅支持者だったらしい。大正四年（一九一五）三月の衆議院議員選挙では、小川芳太郎は国民党の山谷虎三を応援していた。山谷虎三は落選したが、大正五年（一九一六）年九月に当選していた国民党の萬代が失格し、十月に山谷が補充当選を勝ち取っている。

そして、この大正六年（一九一七）四月の衆議院議員選挙では、小川芳太郎は坂本金弥を支援している。

「帯江研」だよりは、Vol.6から帯江鉱山研究会のホームページに掲載することになりました。

#### 「有志会員」

- ・在間 宣久（元岡山県立記録資料館長）
- ・上田 賢一（元岡山大学非常勤講師）
- ・小西 伸彦（産業遺産学会理事長）
- ・小柳 智裕（就実大学講師）
- ・近藤 修六（医療法人六峯会理事長）
- ・柴田 正子（裏千家茶道教授）
- ・高橋 義雄（岡山歴史楽修塾代表）
- ・戸板 啓四郎（中庄の歴史を語り継ぐ会）
- ・永瀬 彰博（中帯江老人会長）
- ・難波 俊成（岡山人俗学会名誉理事長）
- ・村上 節子（文化史研究家）